



闘争の歴史と兵法 (兵法はなぜ現代に生きているのか)

4月①のごあいさつ

山内公認会計士事務所
2022年4月1日(金)

人類の歴史は、ロシア侵攻の今に至るまで闘争の歴史である。

闘争という人間のギリギリの場で突きつめたものが兵法に他ならない。

武経七書とは兵法の古典であり、「孫子」、「呉子」、「尉繚子」、「六韜」、「三略」、「司馬法」、「李衛公問对」の七書とされ、兵法の原典である。

これらの兵書に共通しているのは、単なる戦争の技術ではない。武を説いてはいるが、その底を流れるものは思想であり、人間の分析である。

何故、中国にこのような兵法が発展し、今日まで伝えられたのか。

中国紀元前8世紀から前3世紀の550年間の春秋戦国時代、中国は政治、経済、文化とも今日の世界に比すべき世界を構築した。

春秋の五覇、戦国の七雄と言われる大国が割拠し、当時の世界(中国)に思想家、学派いわゆる「諸子百家」が出現した。

兵法もまた、その一つとして生まれたのである。

戦国時代に180年間記録されている大戦争だけでも230に達すると言われ、後漢時代の学者「班固」によれば、諸子百家の著作等約600のうち「兵書」は53種に達する。

この激動の時代に生まれた兵書のうち、最も代表的なものが、「孫子の兵法」である。

「ナポレオン」が「孫子」を座右の書としていたことは有名であり、日本でも武田信玄の旗印「風林火山」が、「孫子・軍争編」から出たこともよく知られている。

春秋時代の末、孫子は呉王闔閭に仕え、呉王が「楚国の都」を攻めようとしたとき、「戦いが続き、人民は疲弊しています。その時、未だ至らず。」と出撃することを止めた。

四年後、王が再びたずねた時、孫子は、「楚の属国、唐と蔡に反楚的な空気が強まっています。この両国と同盟して楚を撃てば、必ず成功します。」と答え、呉は楚に戦勝した。

その後、「呉国の王・闔閭、夫差」と、揚子江の下流に栄えた「越国の勾践」が死闘をくり返した「呉越戦争」は、「臥薪嘗胆」という諺を残したことでも有名である。

参考：史記(呉太伯世家)、司馬遷史記(徳間書店)